渋川家歴史の変遷

平成三十年五月十日

清藤　孝　記

渋川家歴史の変遷

治承四年（一一八〇）源頼朝が石橋山で平家討伐の旗揚げした時、その報に呼応し、足利義兼（よしかね）は足利庄より頼朝の下へと馳せ参じ、鎌倉幕府の成立に貢献し、御家人としての地位を確立した。

当初の幕府には、頼朝の妻・政子と父親の北条時政が幕閣の第一位に、次に頼朝の乳母・比企家が続き、頼朝の旗揚げの功労者三浦一族等名だたる御家人が揃っていた。

しかし、建久九年（一一九九）頼朝の急死を境に御家人同志の勢力争いが始まり、健保六年（一二一九）三代将軍の実朝（さねとも）が暗殺されることにより鎌倉時代の源氏は三代で幕を閉じ、執権の北条時代に移っていく。

幕府の権力が北条家に移行するにつれ、比企家、梶原家、和田家等が排除されていく。このような状況下で足利家は、ひたすら執権北条家と縁戚関係を結び家門の安泰を図っていく。

三代執権北条泰時の時代、足利家も三代足利泰氏（やすうじ）となる。

そして、泰氏の次男・兼氏（後に義顕）が上野国・渋川郷を知行され、渋川家初代となっていく。生年不明となっているが、足利家を継いだ弟の足利頼氏（一二四〇～一二六二）から推測すると、一二五〇年ころではないかと推測される。

渋川家二代は渋川義春が継ぐ。生年不明となっているが、時代的には足利五代家時から六代貞氏のころと考えられる。

そして、鎌倉幕府は八代執権時宗（一二六八～八四）の時代で、国内では蒙古軍の二度にわたる襲来があり（文永一一年・1274、弘安四年・1281）、時宗の鎌倉幕府は、この厳しい襲来を撃退し国土を安泰に導いたが、一方においては幕府の財政は悪化し、また御家人に対する恩賞も少なく、御家人に大きな負担をかけることによって、御家人の間では大きな不満を抱くものも現れてきた。

そして、元弘三年（一三三三）鎌倉幕府は、新田義貞、足利尊氏、足利直義（ただよし）によって倒され滅亡す

ることになります。

その時の渋川家三代は渋川貞頼（さだより）が継いでいる。そして、貞頼の娘・本光院は、鎌倉幕府の討幕の立役者の一人・足利直義の正室として嫁いでいるので、足利家の重臣として幕閣の位置を占めることとなった。これから推察するに、三代貞頼の生年は一三三〇年前半ではないかと考えられる。

暦応元年（一三三八）足利尊氏は足利直義と室町幕府を京に創り上げる。その時、鎌倉は足利家にとっても東国を治めるため重要拠点として「鎌倉府」を設置する。

渋川家四代目は渋川義季（よしすえ）となります。「鎌倉府」を設置しても、まだ、北条家の残党が跋扈して、この北条家の残党狩りの時、四代義季は二二才の若さで敗死してしまう。しかし、娘を残し、これが成人し渋川幸子（しぶかわこうし）として、室町幕府二代将軍義詮（よしあきら）の正室となっていく。

渋川家五代は渋川直頼（ただより）になりました。直頼は備後国御調郡（びんごのくにみつぎぐん）の所領を得たという。この頃室町幕府の重鎮として渋川家は京都を本拠としたと推察される。

そして、記録では六代義行に対し、膨大な所領の譲り状を書き残し二二才で亡くなったとなっています。この譲り状に「蕨郷上下」が書かれている。

（この譲り状は、広島県三原市の賀上家文書として現存している）

渋川家六代は渋川義行（よしゆき）となり、足利二代将軍の正室となった伯母（渋川幸子）からの強い意向があったのか、九州探題に就任。しかし二八才で死去します。

渋川家七代満頼（みつより）から、渋川家八代義俊（よしとし）と九州探題を務める。

渋川家八代は義鏡（よしかね）となります。この義鏡は京の室町幕府から関東の秩序維持のため派遣され、堀越公方の補佐役として下向してきた。そして、「知行国の蕨郷に城を築き、初代蕨城の城主」となった。

蕨城主二代は渋川義堯（よしたか）となったが、小田原・北条早雲の出現

により、世は戦国時代に突入していった。蕨城も小田原北条二代北条氏綱(うじつな)の傘下に組み入れられていく。

この頃の関東の争いは、「享徳の乱」として、小田原北条（後北条）×山内上杉×扇谷上杉×古河公方の入り乱れた戦いが 1454~1483 の二八年間に及ぶ戦いとなっていく。

この中で蕨城も重要なポイントとして、小田原北条の三代北条氏康（うじやす）に引き継がれていく。天文一五年（1546）の河越夜戦（かわごえよいくさ）に大勝利をした小田原北条はますます関東全域に勢力を伸ばしていく。

蕨城三代渋川義基（よしもと）の時代は小田原北条四代氏政（うじまさ）の傘下となり、小田原北条の援軍として度々戦場に赴くこととなる。山内上杉×扇谷上杉×古河公方の勢力を関東の地から排除しつつあったが、房総の里見氏の抵抗を受け、さらには里見水軍の攻撃で鎌倉を破壊される事態もあった。そこで、小田原北条の北条氏政は里見氏討伐を行った。

その援軍として蕨城主渋川義基は出陣した。その戦場であった房総三舟山合戦で小田原北条軍は勝利したが、残念ながら蕨城主渋川義基は永禄十年（1567）帰らぬ人となってしまった。

京の室町幕府も足利十五代足利義昭（よしあき）は、織田信長によって天正元年（1573）将軍職を追われ室町幕府は終焉してしまう。

このように渋川家の総本家足利家は権力の座から外れることから、足利家支流の渋川家もその地位を追われ、蕨城も小田原北条となっていく。

一方、里見合戦で蕨城主を失い、生き残った家臣団は蕨郷の土地に帰順したが総本家足利家の崩壊により、この地に定着していく事となりました。

そして、本能寺の変(1582)があり、やがて小田原北条も豊臣秀吉の軍門に下り、天正十八年（1590）には、徳川家康が関東一円を治めることになる。

天下を治めつつある徳川家康は日本橋を起点に主要五街道を定め、過っての蕨城の辺りは、中山道の江戸から第二番目の「蕨宿」として、渋川氏の家臣団の力も生かされ発展していく事になります。

【完】

足利家の系図

鎌倉楽しむ会
30：4：25 の資料

足利義兼（1180）
源頼朝の御家人となる。鎌倉浄妙寺の創建

足利義氏

足利泰氏

足利頼氏

足利家時
鎌倉報国寺の創建

足利貞氏

足利尊氏（1338）
室町幕府初代

足利義詮（1358）

足利義満（1368）
金閣寺創建

足利義持（1394）

足利義教（1429）

足利直義

鎌倉公方

足利基氏（1348）
尊氏の次男 鎌倉府

足利氏満（1367）

足利持氏（1409）

古河公方

足利成氏（1449）

渋川家の系図

渋川兼氏（義顕）
足利泰氏の次男 渋川家の祖

渋川義春

渋川貞頼
娘・本光院は直義の正室

渋川義季（1314-35）
娘・幸子は義詮の正室

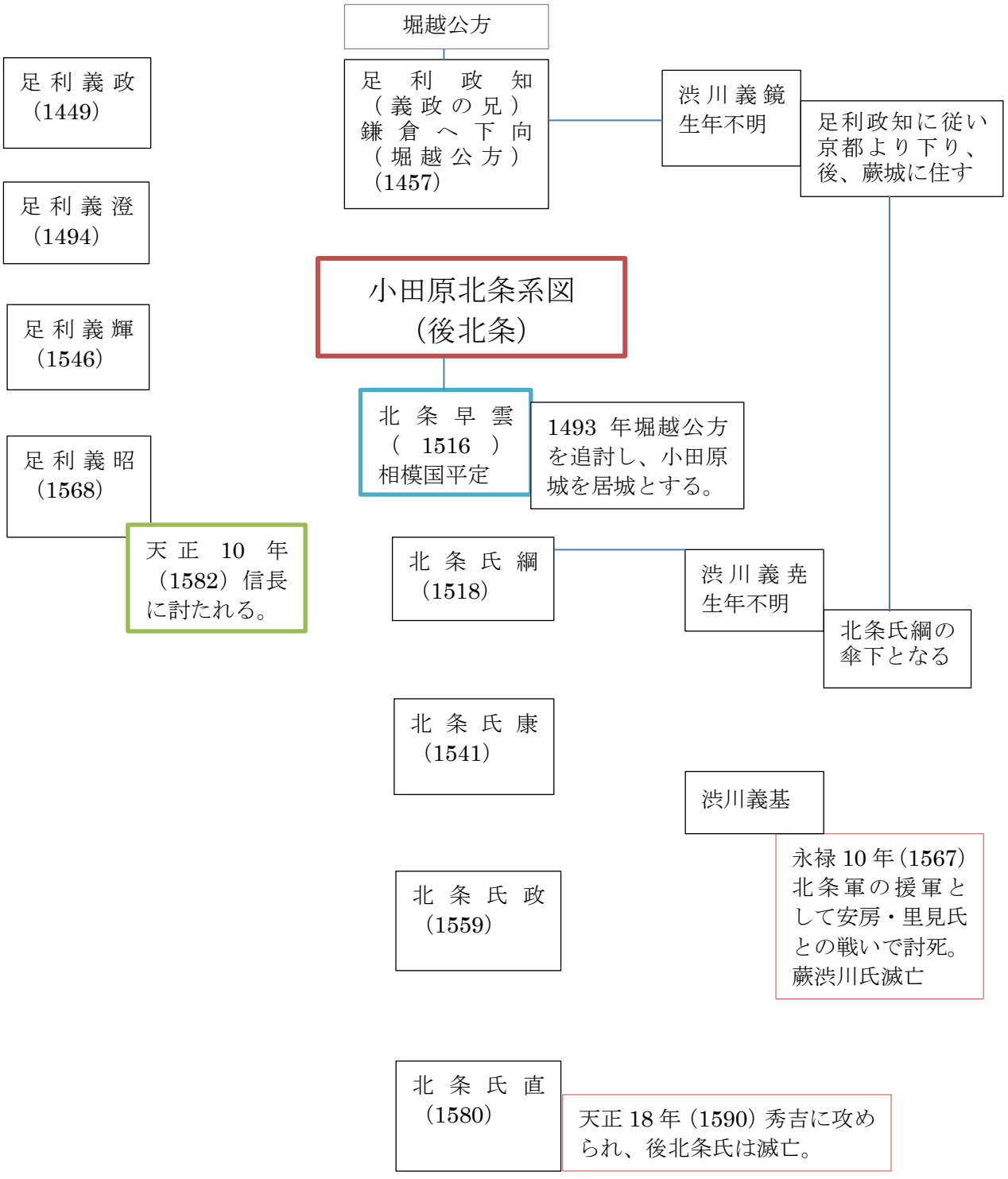
渋川直頼（1335-56）
備後国後調郡を所領

渋川義行（1348-75）
九州探題・備中・備後の守護、蕨郷を知行国

渋川満頼（1372-1446）
九州探題

渋川義俊（1400-34）
九州探題

≪次へ続く≫



〈注〉① 足利家系図、鎌倉公方、古賀公方、堀越公方、後北条系図の年号は夫々の当主となった時の年号です。

② 渋川家系図の年号は各当主の生存年です。